

# 地域とのかかわりを発信することで情報活用力を高める単元開発

～フリーペーパーで朝市・祭りを情報発信～

上越教育大学附属小学校

〒943-0834  
新潟県上越市西城町1-7-1

<http://www.juen.ac.jp/element/>

## ■本研究の着想の背景や研究開始にいたる問題意識

現代社会は核家族化や少子・高齢化，利己的な考えの増加などからコミュニティが消失し，かかわりが希薄になっている。顔の見える関係を大切にしながら，膨大な情報が行き交う社会を生きる上で，情報メディアをよりよく使う力も必要となる。急速に変化する情報化の光と影に，教え込まれた知識や技能では対応できない。体験や実感を通して考え，共有し合うことで，実践力として機能していくのである。

## ■本研究でどのような成果があがったのか

### ○取材やイベントによって，地域のよさ，人のあたたかさを実感する

週1回程度訪ね，本当によくしていただいた朝市の方と数多くかかわった。フリーペーパーをお店に飾り，おまけをしてくれる方も多し。子どもたちは試食をさせてくれたり，優しくいろいろなことを教えてくれたりする行きつけのお店の方が大好きになった。また，月に一回の子どもたちが計画し，バスや電車で行く「お出かけ取材」で，郷土に対する愛着を膨らませた。子どもは四季や自然の恵みが豊かな地域のよさ，そこで育まれた人々のあたたかさに気付いていった。フリーペーパーや地域誌とタイアップして子どもの写真や記事を発信することから，地域が活性化したり，朝市の人が喜んだりする充実感を味わった。

### ○ファインダーを通すことで，みる行為が深化する

一眼レフカメラを持った取材で，ものをみる目が，細やかになったり，変化を感じたりするようになった。ファインダーからものや風景をのぞき，時間と空間を切り取ることで，対象の認知が深まっていく。また，写真を軸に，見出しや本文を加え，ブラッシュアップしてフリーペーパーにしたり，写真と詩をコラボレートさせたりしてきた。思いや考えを再構成して視覚化し，発信することで，同じ対象に対しての論理的思考と感性をかかわらせてはたらかせることにつながった。

### ○経験とフィードバックの繰り返しから情報活用の実践力と情報化社会に参画する態度が育まれる

撮りためた写真や感想カード，インタビューから，月1のフリーペーパー作成や，地域紙「にいがた komachi」への季



節ごとの記事掲載を重ね、言語活用力や情報活用の実践力を高めた。見出しと写真、本文を組み合わせ、正しく情報を伝えるとともに、どう読者が読みたい記事にするかという試行を、経験とフィードバックで重ねてきたからである。また、通っている朝市の人というプライベートとパブリックの狭間の方への発信から、雑誌への記事掲載というパブリックな発信へと経験をつなげた。お店の人の顔やお客さんを思い浮かべ、情報の信頼性、著作権や肖像権など、情報発信に対する責任や社会への影響を体験的に感じ、様々な立場に立って情報への考えをつくった。

#### ■学校教育全体における本研究の意義

教師が活動内容を決めるのではなく、子どもが自ら考え、行動する活動を1年間重ねることで、どのような力が付いていくのかを明らかにすることができた。

本校がある新潟県上越市は、海、山があり、雪が多く降る四季の変化や自然に富んだ地である。子どもは、「じょうえつ.net」という情報発信局を開設し、子ども記者・子どもカメラマンになりきって、デジタル一眼レフカメラと取材手帳を手に、朝市や市内各地に繰り返し訪れ、心の動いたものを取材して、フリーペーパーにまとめるという活動を行った。

本活動では、繰り返し朝市や地域の人、もの、こととかかわり、よさを集めたり再構成したりする中で、人のあたたかさや郷土のよさ、季節の変化に気付いていった。また、撮りためた写真や感想カード、インタビューなど集めた情報をまとめ、フリーペーパーや、より公共性の高い地域誌での情報発信を行った。相手と目的を意識して調べ、まとめて、伝えることで、思いや考えが相手に伝わる文章を書いたり、写真の選択、レイアウト、見出しの読み手への効果を考えたりし、活用、探求を通した主体的な言語活動が行われた。情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信する活動から、情報活用の実践力を高めるとともに、著作権や肖像権を意識し、情報発信の責任や社会への影響を、体験をベースに自分の考えをつくり、実践力として機能させる経験を重ねることができた。朝市には、その時期の地産の食材が並ぶ。毎週、訪ねることで、店頭や人々の会話などの移り変わりから、季節に関係するものを見つけられる。繰り返し訪れ、お店の人やお客さんと顔馴染みになり、季節の変化を感じるとともに、地域や人とのつながりからあたたかさを感じることができた。

また、地域にはブナ林や海水浴場、スキー場といった観光地も多くある。月1回のペースで子どもが計画を立て、電車やバスで市内の各地に赴く「お出かけ取材」を行い、地域のよさを体感していった。季節に即した人々の営みと地域のよさを、体を通して感じるができる活動を繰り返すことができた。

#### ■本研究がユニークであるといえる点

○ファインダーを通して見ることで主体的に人、もの、こととかかわり、感性や思考力をみがく

春、学校脇の原っぱは、まだ雪が残る枯れ野原だった。子ども記者としてカメラを手に飛び出した子ども記者たちは、「あ、こんなところに春を見つけた!」と、フキノトウやツクシ、まだ固い桜のつぼみを探し出していった。50mmマクロレンズを付け、腹ばいになってフキノトウにシャッターを切っていた直樹さんは「上手に撮れたよ」と写真をプレビューして見せてくれた。「フキノトウって、この一つ一つが花なんだ!」と興奮して友だちにも教え、観察が始まった

シャッターボタンだけ教えた一眼レフカメラは、子ども同士で試行し、教え合



いながら使い方を習得して、構図や主題を意識して撮影をしていくようになった。

4月12日、取材を重ね、取材カードもたまってきた子ども記者。昨日も、桜咲く高田公園取材の後に、駅前の本町まで足を伸ばした。今日は、学校から歩いて15分くらいの通りに開かれる朝市に出発した。

色とりどりに咲く花に、山菜やタケノコなど山の幸、キムチ屋さんにも果物屋さん。面白そうなものを次々見付け、観察してカードに描いたり、写真を撮ったりする中、見たことのない山菜を見つけた誠人さんは、早速、お店の人にインタビューをはじめた。



誠人さん：「これは何ですか？」

お店の人：「これはね、イタドリという山菜だよ。」

誠人さん：「おじさんが採ってきたんですか？」

お店の人：「そうだよ。この大きさだと、柔らかくておいしいよ。」

誠人さん：「もっと大きくなるんですか？」

お店の人：「2m位になるけれど、大きくなると固いんだよ。」

担任：「先生は172cmだから、先生よりももっと大きいよ。」

誠人さん：「すごーく、大きくなるんだね。」

お店の人：「春の芽とも言うね。茹でて食べると春の味がするよ。」



一人300円ずつお家の人からもらって出かけた朝市取材。誠人さんはイタドリを買うことにした。他にもフキノトウやコゴメ、タケノコなどの春の味を買う子ども、枝で売っている桜の花を買って教室に飾った子どもなど、思い思いにお店の人とのコミュニケーションをしながら買い物を楽しんだ。教室に戻って買ったものを自慢し合う子、花を飾る子。イタドリやコゴメは天ぷらにして味わった。

朝市以外にも、自分たちで下調べをし、取材計画を立てて、バスや電車でのお出かけ取材に行った。「春日山なら、自然も多いし、謙信公のことが調べられるよ。バスなら15分くらいで行けるよ」、「夏なんだから、やっぱり海でしょ！海も水族館のイルカショーも、港も取材できるよ」など思いを主張して、学級でコンペティションをした。勝ち抜かないと自分の行きたい場所に行けないので、その場所のよさや取材できる対象、季節との関連などを必死で調べ、地図やパンフレット、時刻表を見せながらプレゼンテーションを行った。



7月のお出かけ取材は海岸部の直江津に決定。水族館でイルカショーに参加し、お昼ご飯を佐渡汽船ターミナルで食べながら、フェリーの入港や火力発電所を写真撮影、直江津海水浴場ではカニや貝殻取りをたっぷり楽しんだ。



他にも、上杉謙信の居城であった春日山、五智公園、シーサイドパーク、うみてらす名立、鶴の浜温泉街などへ出かけ、フリーペーパーにまとめる中で、自分たちの住む市の豊かな自然や観光名所、名産を味

わうとともに、交通網や物流、産業、市街地と郊外の違いを感じていった。

以上のように、一眼レフカメラという道具をもった子ども記者となって、年間を通して朝市や市内各地を訪れたことにより、主体的に人、もの、こととかわり、感性や思考力をみがく姿が数多く見られた。

○取材と実際の情報発信活動を通して、人や地域社会と双方向でかわり、地域のよさを実感する。

「また行きたい」という子どもたちの声に押され、年間で朝市には40回弱程出かけた。買い物を重ねる中で、たくさんものに出会うとともに、学級では1学期だけでもコゴメ、ワラビ、新ジャガ、イタドリ、トマト、トウモロコシ、タケノコ、梅から作った梅ジュースなど数多くを味わった。ファインダーをのぞいて写真を撮ったり、お店の人に説明を聞いたりしながら、お店に並ぶ珍しいものを見つけ、取材カードに見付けたり驚いたりしたのやことへの気付き、お店の人との会話などを記し、蓄積した。学級の友だちには、朝市取材が終わった後にどんなものを見つけたかを伝えている。さらに「いつも優しく接してくれる朝市の方やお家の人に、自分たちが見つけたものや心が動いたことを伝えたい」という声から、フリーペーパーをつくることになった。

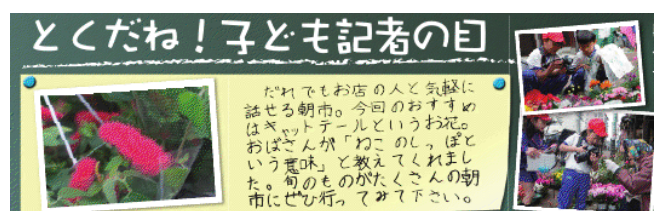


いつも通う朝市の花屋さんで、ピンクでふわふわの面白い花を見つけた沙耶さんは、ケイトウの仲間で、「猫の尻尾に似ている形なのでキャットテールという名前だよ」と教えてもらった感動をトップ記事に選んだ。撮ってきた写真を貼り、見出しや小見出し、本文の内容を考えて、「変わったお花や優しいお店の人との話が楽しい朝市の花屋さんにはぜひ行って下さい」と、自分の感想や考えを書く「子ども記者の目」を表し、カラーコピーして渡しに行った。

「上手に書いたねえ」と褒められ、お店に貼ってもらって満面の笑み。フリーペーパーにまとめることで、客観的な情報と、自分の思いや考えの双方を再認識し、見つけた人、もの、ことへのとらえを確かにしていった。

フリーペーパーを、もっといいものにしようと、タウン誌「にいがた komachi」の編集部長の井上さんを招いて、読む人の心をつかむにはどうしたらいいかを考えた。

「記事を書いてみる？」という井上さんの言葉から、雑誌の記事を書くことになった。学級全体で何を書くか考えた春・夏の記事は、沙耶さんの取材したキャットテールを題材にした。写真や言葉、キャッチコピーを選んだ「誰でもお店の人と気軽に話せる朝市」。自分たちの記事が本屋さんで売っている雑誌に載っているのを見て、子ども記者は大喜びし、地域や社会とかわり、上越市のよさをたくさんの人に伝えられる充実感を得ていた。年間を通して、3回の雑誌への記事掲載を行う中で、様々な立場の人が読んだ時、どう



すれば心を動かし、正しい情報を伝えられるかを考えていった。

#### ■どのような点が他校のモデルとなり得るのか

##### ○ICT活用について

1班4人で取材チームを編成し、1班1台のデジタル一眼レフカメラを手に市内の朝市や各地へ出かけた。心が動いたものを撮影したり絵にかいたりし、取材手帳に挟んであるA5判の取材カードに、インタビューしたことや感じたり考えたりしたことを記述した。班で行動することで、機器の使用方法や活動に向き合えない子へ声を掛けたり、自分の興味とは違うものにも出合ったりしていた。



##### ○情報発信について

教室に戻ると、取材カードをまとめたり、プリンタにメモリーカードを差し込んで写真用紙に印刷し、取材カードやフリーペーパーに張り付けたりした。記事の多くは、お店の人から聞いた情報やお客さんからの感想、自分で感じたり気づいたりしたことであるが、対象の正確な名前や旬がいつなのかなど、本やウェブで事後調査も行い、情報活用の実践力を育むことができた。お出かけ取材では体験談に加え、観光パンフレットや旅行雑誌、ウェブを活用などで事前調査を行う姿が見られた。イベント情報や利用料金だけでなく、地図や時刻表で行先までのアクセス方法を調べ、電車やバスといった交通手段や出発時刻を決めて取材に赴き、子どもが為すことによって学んでいく姿を見ることができた。子ども記者になりきるための道具や発信方法の本物感と、デジタルとアナログ双方で情報活用の必然がある活動を仕組み、体験を通して情報活用の実践力が自然に高まるデザインに起因すると考えられる。

#### ■研究の今後の継続性や発展性

子ども記者は、写真やフリーペーパー、詩などで感じた地域のよさや人のあたたかさ、季節の移ろいを多様に表現・発信した。情報を発信し、フィードバックを重ねる中で、情報量や即時性などメディア特性の違いを実感するとともに、世の中にあふれる情報は、編集やまとめ方で、多分に発信者の意図が含まれることを感じ、主体的に情報を読み解き、クリティカルにとらえるようになった。体験を通して感じ、考えたことを情報発信することにより、地域や季節とのかかわりに意味付けされるとともに、必要な情報を主体的に収集、判断、表現、処理、創造する活動を繰り返し、受け手の状況や思いを踏まえた情報活用の実践力、実践的な情報化社会に参画する態度が育まれた。



体験を基にした子ども発の学びは、子どもに深く根を下ろす反面、場当たりの必要な内容を網羅できない危惧がある。3年生における情報活用力を教師がしっかりと思い描き、子どもと活動を営む中で、子どもの体験場面から感度高く考える場を設定していくことを意識し、実践を進める必要がある。



小学校段階での情報活用力の育成に当たっては、顔と顔が見える実際のかかわりの中で、そのよさをたっぷりと感じることが大切であると考えます。

3年生という9歳半の節目直前の子どもがもつ行動力と自発性を十分に発揮させ、実感あるコミュニケーションを体得することで、これから生きていく高度に情報化された社会の中でも、顔の見えない相手へ思い馳せることができると考えます。